

学校に

新しい「学びの指標」を導入します！

一人ひとりに着目

[学びの総体] → 新しい「学びの指標」

生徒一人ひとりの

- 今の状態を受け止め、受容し、支援する
- 変容・成長を受け止め、支援する

学校を → 生徒一人ひとりの存在や人権、個性が大切にされ、
生徒が生き生きと学ぶことのできる空間に

それにより

個人と社会のWell-being* の実現

* Well-beingとは、一人ひとりが心身の潜在能力を発揮し、人生の意義を感じ、
周囲の人との関係のなかで生き生きと活動している状態のことであり、近年
OECDやユネスコでも教育の達成目標として重視している。

新しい「学びの指標」とは

新しい
「学びの指標」

- 1 考え方(理念)
- 2 具体的な指標(質問形式)
- 3 活用

新しい「学びの指標」の令和4年度の方針について

学びの改革支援課

1 新しい「学びの指標」のコンセプト

理念

他の生徒と比較する相対的な評価に価値を置くことを排する
生徒一人ひとりの今の状態を受け止め、受容し、支援する

▶ 個人と社会の Well-being

全県共通質問

- 自分なりの価値観や考え方をもっている
- これから先、どのように生きていきたいかを考えている
- 自分にはよいところがあると思う

活用

- ・生徒が現在の自己を認識し、自身の変容・成長を自覚する
- ・教員が生徒の状態を受容し、変容・成長を受け止め、支援し励ます
- ・学校が教育内容や指導を振り返り、改善、充実に向けて検討する

共通質問に肯定的に回答する生徒の割合が増えることを期待するが、生徒に強いるものではない

2 「学びの指標」の全県回答状況の分析（信州大学 島田英昭 教授）

- 全高校生の回答データを基に、肯定的な回答割合を数値目標として指標にすると、肯定的な回答を生徒に求めることとなり、「生徒の状態を受容し支援する」というコンセプトと異なる
- 個人内変化（プラスやマイナスへの変容）に着目するか、「学びの指標」が各生徒の学校生活の充実に役立ったのかを別調査で問う方法が考えられる
 - ・個人内変化を扱うことを明確にする場合、現在の4段階では、実際に増加・減少があっても同点になり検出できない可能性がある。回答の段階を増やし、生徒のわずかな変容も検出できるようにする
 - ・「学びの指標」に回答して自己を振り返ったり、先生や保護者と対話したりすることによって、自身の学校生活の充実に繋がったか等、「学びの指標」の機能について別アンケートを実施

3 令和4年度の方針

- 令和3年度の試行の際、「生徒個々の現在の悩みが浮き彫りとなり、適切なアドバイスができる」「フィードバックにより面談の種ができて、教員は生徒を理解し、生徒は自己を見直す良い機会となった」等の声が届いており、一番の目的である「活用」がなされている様子がうかがえる。
- 「学びの指標」の回答状況を基に、全県の高校生の学びの状況を把握しようとする際、肯定的な回答をした生徒の割合等の数値を目標に掲げることはしない。



- ・R4は「全県共通質問」に加え、「学校独自質問」を各校で検討し設定する試行期間とする。
- ・「学びの指標」は、質問に回答することにより、生徒が自身を振り返り自己認識を深めることを期待している。年間に行う質問の回数も、各校が実情に応じて実施できるようにする。
- ・「学びの指標」の質問への各生徒の回答やその理由の記述は、教員や保護者等による生徒への支援や各校の教育活動の検証等に活用し、県教委がそのデータを集約することはしない。
- ・全県の高校生を対象に、「学びの指標」による自己の振り返りへの機能の様子や、今の学校生活の充実度等を県教育委員会が別途アンケート調査し、高校生の学びの状況把握を行う。その際、Google フォームを活用し、学校が集計作業を行わずに済むようにする。

長野県立中学校・高等学校 新しい「学びの指標」について

1、令和3年度実施調査に対する分析（信州大学教育学部 島田英昭先生による）

(1) 「学びの指標」調査の意義

- ・「個人と社会の Well-being の実現」を学校教育の一つの目的として設定し、それを評価するために具体的な指標の設計まで行ったことは非常に高く評価できる。
- ・全県共通質問の3つの要素（自己の確立、自己のキャリア、自己肯定感）は、最小限の共通指標として妥当。

(2) 「学びの指標」調査結果の考察

- ・第1に、1回目と2回目と同じ回答である生徒が約50%を占めていることから、自己の確立、自己のキャリア、自己肯定感について、約半数は変容していないと考えられる。これは、高校までの学校生活12年間と比較して、実施間隔の8ヶ月は短く、それほど変容せずに安定していることや、回答段階が4段階のみであるため、その変容を十分にとらえきれていないことが可能性として考えられる。
- ・第2に、いずれの価値観でも、増加している度数が減少している度数より多かったことから、平均的に価値観がプラスの方向に変容していると考えられる。
- ・ただし、これらの解釈に対しては、留意点として、増加と減少の間にある1～5%程度の差を大きいと考えるか微小と考えるかという点と、平均的な変化は望ましい方向だが、一方で減少している割合もそれに匹敵する程度にあるという2点が挙げられる。
- ・最大の成果として指摘できる点は、このようなデータをもとに議論することで、曖昧であった方向性を数値から明確にする一つの契機となっていることである。

(3) 「学びの指標」調査に関する意見

① 個人内変化を扱うことの明確化

回答の直接的な値でなく時系列に沿った差分（伸び）が重要であることをより強調すべきである。今回は4段階回答のため困難であるが、増加や減少の程度（差の大きさ）を扱ってもよい。

② 個人の伸びを評価できる選択肢

4段階の場合、差分（伸び）を評価しにくく、実際に増加／現象があっても同点になり、検出できない可能性がある。回答の段階を多くても10段階程度に増加させることで、増加／減少の程度を数段階で扱うことが可能になる。

③ 指標の安定性の問題

1項目で一つの要素を測定しているために誤差が大きい。可能であれば、同じ概念を測定する項目を増やし、その平均値を分析の対象にすることで、評価の安定性は増す。

④ 具体的介入策の検討

今回は調査のみで独立しているが、どのような介入を行えば「学びの指標」がプラスに変容するのか、具体的な介入策を検討することが必要である。何らかの仮説をもって具体的な介入を行い、その効果を本調査の項目で測定し、さらに介入策を洗練させるといったサイクルが望まれる。

⑤ データ収集のプロセスの改善

業務削減につながることから、データの集計を可能な範囲で自動化した方が良い。自由記述欄を無くす等により自動的にデータ収集ができる仕組みが考えられる。一つの策として、悉皆型の全県調査と抽出型のサンプル調査に分け、それぞれ目的を持たせて進めることが挙げられる。

⑥ 心理学研究等からの理論化

本調査が対象としている分野は、心理学的研究が盛んに行われている。心理学的研究は測定の尺度が明確であるため、本調査のようなエビデンスベースの議論を進める際には有効性が高い。心理学の専門家との協働になると考えられるが、検討しても良い。

OECD ラーニングコンパス等、背景理論が調査の必要性を担保していることに加えて、理論的な背景を調査と同時に示すことで、個々の教員が Well-being に対する理解を深めていくことが期待される。

⑦ 学校外の学び・生活との関連

学力ではなく Well-being を対象とした場合には、生活全般に関わるため、介入策を考える場合には、学校だけではなく家庭を含めた生活全般を考慮することが望まれる。

また、日本固有のメンバーシップ型の終身雇用制度の維持が困難になり、1つの組織に所属する時代から、多数の組織に同時に所属して活動する時代になっているため、Well-being を生活全般から考える際は、一つの視点として考慮する必要がある。

2. 新しい「学びの指標」今後の方向性

新しい「学びの指標」は、生徒の今の状態を受け止め、受容し、励ますものであるとともに、生徒の変容・成長を受容し、支援するものである。

- (1) すべての生徒がプラスに変容することを強いるものではないが、その変容を期待して学校教育を行っていくことが肝要であると考え。
- (2) 理由記述については、学校現場において、面談や声がけ等、生徒への必要な支援・指導に役立てるものとする。
- (3) 高校生の学びの状況を把握するために、「学びの指標が自身の振り返りに役立っているか」「学校生活の充実度」等を、県教育委員会が生徒に別途調査を行う方向で検討を進める。
- (4) 全県共通質問3つについては引き続き全校で実施する。また各学校の実状に応じた生徒の実態を把握し、支援に役立てるため、各学校において学校独自質問について検討を進めていく。

「学びの指標」 生徒回答パターン結果

(実施時期 1回目：6～7月 2回目：1～2月 対象 全県立高校生徒 41883名)

〔全県共通質問〕

〔回答選択肢〕

質問1：自分なりの価値観や考え方をもっている

A：そう思う

質問2：これから先、どのように生きていきたいかを考えている

B：どちらかといえばそう思う

質問3：自分にはよいところがあると思う

C：どちらかといえばそう思わない

D：そう思わない

回答パターンごとの総人数

－：回答できない・回答したくない

+に変容	変容無し	-に変容
------	------	------

全県共通質問1の回答番号

		1回目					
		－	D	C	B	A	
2回目	－	154 (0.6%)	45 (0.2%)	96 (0.4%)	419 (1.7%)	279 (1.1%)	993
	D	39 (0.2%)	87 (0.4%)	88 (0.4%)	139 (0.6%)	59 (0.2%)	412
	C	108 (0.4%)	119 (0.5%)	564 (2.3%)	796 (3.2%)	352 (1.4%)	1939
	B	330 (1.3%)	214 (0.9%)	1045 (4.2%)	6963 (28.1%)	2852 (11.5%)	11404
	A	205 (0.8%)	164 (0.7%)	446 (1.8%)	3474 (14.0%)	5783 (23.3%)	10072
変容割合の合計		22.1%	54.1%	17.3%			24820

全県共通質問2の回答番号

		1回目					
		－	D	C	B	A	
2回目	－	171 (0.7%)	80 (0.3%)	152 (0.6%)	337 (1.3%)	273 (1.1%)	1013
	D	54 (0.2%)	219 (0.9%)	261 (1.0%)	280 (1.1%)	171 (0.7%)	985
	C	138 (0.6%)	320 (1.3%)	1080 (4.3%)	1307 (5.2%)	585 (2.3%)	3430
	B	317 (1.3%)	411 (1.6%)	1614 (6.4%)	6011 (24.0%)	2701 (10.8%)	11054
	A	192 (0.8%)	243 (1.0%)	665 (2.7%)	2774 (11.1%)	4680 (18.7%)	8554
変容割合の合計		24.1%	47.9%	21.1%			25036

全県共通質問3の回答番号

		1回目					
		－	D	C	B	A	
2回目	－	541 (2.1%)	180 (0.7%)	383 (1.5%)	663 (2.6%)	334 (1.3%)	2101
	D	119 (0.5%)	562 (2.2%)	342 (1.4%)	327 (1.3%)	170 (0.7%)	1520
	C	288 (1.1%)	478 (1.9%)	1494 (5.9%)	1353 (5.4%)	459 (1.8%)	4072
	B	580 (2.3%)	428 (1.7%)	1465 (5.8%)	6556 (26.1%)	2053 (8.2%)	11082
	A	257 (1.0%)	226 (0.9%)	494 (2.0%)	2014 (8.0%)	3398 (13.5%)	6389
変容割合の合計		20.3%	47.7%	18.8%			25164